

谷口江里也による現代語訳『風姿花伝』 第15回

風姿花伝その二 物學ものまねのいろいろ 修羅しゆら

これもまた、能における物學ものまねの一つのかたちではあるが、よく演じたとしても、面白みを表現できることは稀であって、それほど演じるべきではない。ただ、源平の物語のなかの、有名な人のことを、花鳥風月によせて上手に演じれば、何より面白いものにもなりうる。この場合には、あえて花やかな場面を入れ込む方がよい。しかしこの修羅というかたちの狂まいは、下手をすると、鬼の振舞のようになってしまうので、とりわけ、曲舞くせまいの要素を入れ込むならば、それなりの舞まいをつくりだすためはよいかもしれない。

また弓や、矢を入れる筒状の胡篋やなぐいなどを携え、刀などの打物うちもので飾ることで花やかさを出そうとする場合には、それらの持ち方や使い方をよくよく考え、争いごとや闘いに狂まってしまう修羅ということの本意が反映されるように働はたらく必要がある。とにかく細部にまで気を配り心を構えて、くれぐれも鬼の振舞にならないよう、またふつうの舞まいになっまってしまわないよう、用心しなければならぬ。

文中の色文字は世阿弥が用いた用語をそのまま用いています